

1. 地域の概要

表 地域の概要

地理的 位置	国名及び地域	東アジア 日本 石川県 輪島市												
	緯度経度	北緯 37 度 24 分 29 秒、東経 37 度 24 分 29 秒（金蔵・正願寺）												
	立地条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市から離れた農山村地域</li> <li>・最も近い海から直線距離で約 5km</li> <li>・東京から直線距離で約 300km</li> <li>・金沢市（県庁所在地）から直線距離で約 100km</li> </ul>												
自然 環境	地形及び標高	・輪島市域は半島の北部に位置しており、その多くが起伏のある丘陵地や山地で占められている。												
	気候（数値は気象庁の平年値）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輪島の年間平均気温は 13.2 、年間降水量は 2,156.5mm である。</li> <li>・ケッペンの気候区分では Cfa（温暖湿潤気候）に分類される。</li> </ul>												
	植生及び土壌	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市域の約 60% が山林であり、主にコナラ二次林やスギ・ヒノキ等の植林からなっている。川沿いの低地や盆地部には水田が存在し、輪島市の中心部に僅かに市街地が存在する。</li> <li>・土壌は褐色森林土からなる。</li> </ul>												
	生物多様性と生態系の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・能登半島には二次林や水田等からなる二次的自然が多く残されている。また、輪島市をはじめとした能登半島北部には、ため池が多く存在し、多様な生物によって利用されている。</li> <li>・山腹や山麓には湧水が多く、日本固有種であるホクリクサンショウウオの生息地となっている。能登半島は本種の主要な生息地である。</li> <li>・長年にわたる人の働きかけと自然的営力のバランスによって形成された、棚田を中心とした二次的自然が多く存在し、日本版レッドリスト記載種をはじめとする貴重な植物が多く生育している。</li> <li>・しかし、近年の奥能登地域は、過疎化・高齢化が著しく、里山林や水田等の管理放棄が進んでいるため、二次的自然に依存している生物の減少が危惧されている。</li> </ul>												
社会的 背景	人口（数値は 2005 年国勢調査結果）	・輪島市の 1984 年の人口 46,024 人であったが、都市部への人口流出が進み、2009 年には 32,518 人にまで減少している（25 年間で約 3 割減少）												
	歴史・文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本海に面する輪島は、古代より大陸及び日本各地との交易港として発展してきた古い歴史を持つ地域である。</li> <li>・事例地である金蔵集落は 651 年の金蔵寺開基がはじまりとされ、1300 年代の頃からお寺を中心として栄えてきた。</li> </ul>												
	地域経済（数値は 2005 年国勢調査結果）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輪島市は農林水産業、漆器製造業、観光業等が基幹産業となっている。</li> <li>・2005 年における産業分類別の従業者数は下記の通りである。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="513 1877 1343 2056"> <tr> <td>第一次産業（農林水産業）</td> <td>2,625 人</td> <td>16.3%</td> </tr> <tr> <td>第二次産業（鉱業、製造業、建設業）</td> <td>4,678 人</td> <td>29.1%</td> </tr> <tr> <td>第三次産業（商業、サービス業、その他）</td> <td>8,749 人</td> <td>54.5%</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>16,052 人</td> <td>100.0%</td> </tr> </table>		第一次産業（農林水産業）	2,625 人	16.3%	第二次産業（鉱業、製造業、建設業）	4,678 人	29.1%	第三次産業（商業、サービス業、その他）	8,749 人	54.5%	合計	16,052 人
第一次産業（農林水産業）	2,625 人	16.3%												
第二次産業（鉱業、製造業、建設業）	4,678 人	29.1%												
第三次産業（商業、サービス業、その他）	8,749 人	54.5%												
合計	16,052 人	100.0%												

## 2. 地域の自然資源の利用・管理の実態

### 1) 自然資源の利用・管理の経緯と現状

#### (1) 自然資源の利用・管理に係る土地利用の経緯と現状

- ・事例地を含む輪島市の総面積 42,624ha のうち、山林が 32,735ha (77%)、農地が 4566ha (11%) となっている (2009 年現在)。
- ・事例地がある奥能登地域には起伏に富む丘陵地や低山地が多く、そのほとんどは森林で覆われている。川沿いや海沿いの平坦地を中心に集落や水田が分布している。
- ・内陸から海沿いまで山地が迫る地域であるが、傾斜地にも水田が分布しており、棚田景観が形成されている。また、奥能登地域には人工的に造られたため池が多く存在し、一部は現在も稲作に利用されている。

#### (2) 現在の自然資源の利用・管理の目的と内容

- ・農地では食用として米、野菜、果樹などが栽培され、牧草地で家畜の飼育が行われている。
- ・森林では木材の他、食用きのこ類が生産されている。
- ・沿岸部から沖合かけての海洋では魚介類などの水産資源が食用として漁獲されている。
- ・農地、森林ともに多く存在する地域であるが、森林から堆肥を得て農地に利用するような、森林・農地の資源の循環利用は著しく減少している。

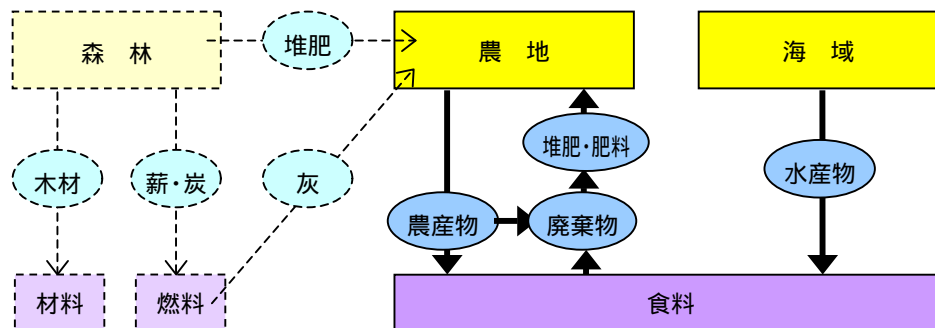


図 自然資源の利用の概要 (淡色及び点線：現在では利用が著しく減少しているもの)

## 2) 自然資源の利用・管理の問題点及び生物多様性への影響

- ・輪島市をはじめとした奥能登地域では近年、都市部への人口流出等による人口減少や高齢化が著しく、雑木林や水田などの管理放棄が進んでいる。これまで、これらの場所は野生生物の重要な生息・生育地となってきたが、管理放棄により植生遷移が進み、環境が変わることで多様な野生生物が生息できる環境ではなくなりつつある。
- ・例えば、事例地である金蔵の集落は多いときで 104 戸と大きな集落であったが、1900 年代半ば頃から現在にかけて過疎化が進み、63 戸まで減少してしまった。集落景観を形成している住居も 3 割以上が空き家となっている。高齢化もすすみ、半分以上の住民が 65 歳以上となっている。これらの要因から農林業の担い手不足が深刻な状況となっており、集落での人々の生活の礎であり、動植物にとっても貴重な生息・生育地となっている棚田の存続が危ぶまれている。

## 3) 上記問題点の解決に向けた地域計画等

- ・事例地を含む石川県では「ふるさと石川の環境を守り育てる条例」を制定している。県土の 6 割以上が起伏のある地形と農地・二次林からなる里山的環境を有する県であり、里山的環境の保全・利活用が地域の環境保全及び地域振興と同義として捉えられている。そのため、この条例は里山的環境に特化した条例ではないが、石川県の里山的環境の保全に繋がるものである。
- ・また、石川県は、単一の部局のみの対応ではなく、多様な部局の横断的な施策展開するため、「里山利用保全プロジェクトチーム」を結成している。

### 3. 取組事例の詳細

#### 1) 取組事例の全体像

石川県輪島市の金蔵地区では、地元住民「NPO 法人 金蔵学校」が中心となり、地域の自然景観や伝統文化を生かしたエコツーリズムや商品販売などに取り組んでいる。

金蔵学校は、金蔵の集落が交流人口を維持することで存続してきた歴史に着目し、現代においても、都市からの来訪者を呼び込み交流人口を増加させることで、かつてのような豊かで活気のある集落の復活を目指している。

表 取組事例の全体像

場所	石川県 輪島市 町野町 金蔵地区
関係主体	<p>【土地所有者】地元住民（主に農業者）</p> <p>【取組の主体】NPO 法人 やすらぎの里 金蔵学校</p> <p>【調査研究の主体】金沢大学</p> <p>【支援者】石川県、民間企業、ボランティア</p>
背景及び経緯	<p>【金蔵集落のはじまりと繁栄】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金蔵の集落の始まりは岩倉山金蔵寺を中心として栄えた寺莊園であると言われている。</li> <li>・1300～1500年頃の金蔵は米を多産し、奥能登地域で最も豊かな集落のひとつであった。また、金蔵にはお寺があり、収穫された米は仏様に納めることとなっていたため、厳しい年貢の取立てからも逃れることができ、お寺を中心として栄えた。</li> <li>・その後、この地域の領主により全村焼き討ちにあうが、集落再生のために、外部からお寺を誘致した。その際に、各お寺と檀家との結びつきも維持するようにしたため、お寺で行われる定期的なお講の際には各檀家が金蔵の集落に集まった。</li> <li>・この仕組みにより金蔵の集落の人口が減少しても交流人口を維持することができ、この地域の中心集落として再興されることとなった。</li> </ul> <p>【内部の団結力による集落の維持】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古くから同じ水系を共有して生活してきたため、住民たちには一体感があり、集落内の行事は常に一体となって行ってきた。また、集落維持のための負担も均等に分かちあってきた。</li> <li>・金蔵の集落は山に囲まれたその地勢から水に不自由していたが、明治期には高い土木技術を活かして灌漑用水確保を目的とした10以上のため池群とそれに繋がる隧道を造成した。この事業は集落の住民で均等に負担して行った。また、どれか一つの池でも損傷すれば集落の住民が一体となって補修を行った。</li> </ul> <p>【近年の金蔵と「金蔵学校」の活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金蔵は1800年代になっても、この地域の中心集落であり、小学校や郵便局も設置されたが、1900年代半ば頃になると都市部への人口流出や高齢化が進行し、1997年には地理的にも文化的にも中心的存在であった金蔵小学校が廃校となった。</li> <li>・このような状況を踏まえ、2000年に地元の有志が集落に元気を取り戻すための団体を結成し、金蔵小学校にかわる心よりどころという意味合いから「金蔵学校」と命名した。金蔵学校は、金蔵の集落を支えてきた「外部との交流」の活性化し、かつての豊かな集落を再現するため、「内部の結束力」を活かした地域ぐるみの活動を実施している。</li> <li>・当初は有志による活動であったが、現在は集落全戸が協力することで合意し、「NPO 法人 やすらぎの里 金蔵学校」として活動している。</li> </ul>

目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の資源を見直し、活用することで交流人口を増加させ、集落を活性化することで自立を図る。そして、かつてのような豊かな金蔵の姿を再現することを目的としている。</li> </ul>
主な内容	<p>【取組方針】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金蔵学校では「私が先生、あなたが先生」を基本方針とし、それぞれが持ち寄った思い、考えを述べることで歴史、文化、自然、社会、健康、生活を考察する。以下の3つの活動方針を掲げている。 <ul style="list-style-type: none"> <li>「やすらぎの里、金蔵」を発見：今に残る地名の由来・伝説を訪ねる。お宮、お寺の由来を訪ねる。（地域資源の再発見）</li> <li>「なつかしき、ふるさとの味」を各地に発信：金蔵産コシヒカリとすわり汁、こげめしなど。（伝統的食文化の継承）</li> <li>「やすらぎの里、金蔵」を発信：四季折々の金蔵（集落、お寺の境内など）、山野草、花木を紹介。（伝統的景観の継承）</li> </ul> </li> </ul> <p>【主な取組内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・集落の歴史研究（集落の歴史や文化、伝説などを研究・記録、金蔵自然文化研究所の開設）</li> <li>・散策コースの整備等（案内板の整備、景観の向上、散策マップの作成等）</li> <li>・特産品の開発（ブランド米、日本酒などの特産品の開発、お寺の境内を利用したカフェでの地場産メニューの提供等）</li> <li>・イベントの開催（都市部の住民も集まる金蔵万燈会等）</li> <li>・自然環境調査（能登半島里山里海の生物多様性調査）</li> <li>・大学との連携（里山駐村研究員制度）</li> </ul>
主な成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・面積は減少しているものの水田耕作が継承されており、棚田の景観をはじめ、古くからの農山村の土地利用・景観・生活が継承されている。また、長年の水田耕作を通じて水辺の豊かな生物相が今日まで引き継がれている。</li> <li>・金蔵の歴史・文化を物語るものとして、寺院などの建造物や、伝説などの無形の遺産が今日まで引き継がれている。</li> <li>・上記のように、金蔵の固有の価値である伝統的景観や自然が保全されたことに加え、外部からの来訪者に対する受入体制も整いつつあることもあって、交流人口が大きく増加し、人口160人ほどの集落に年間8,000人も観光客が訪れるまでになった。</li> <li>・伝統的景観の主要素である棚田で収穫され、また伝統的手法を取り入れることで食味を向上させた米はブランド米として販売されるようになった。これにより米の需要が増加し、金蔵集落の豊かさの礎であり、自然環境の基盤でもある棚田の存続に繋がっている。</li> </ul>



正願寺（金蔵五ヶ寺の一つ）



オープンカフェ「木の音」  
（金蔵五ヶ寺の一つ、慶願寺内）



## 2) SATOYAMAイニシアティブの「5つの視点」から見た自然資源の利用・管理の詳細

本事例と5つの視点の主な関係は、下記の表に示すとおりである。

このうち、関連度合いが高い視点（表中「 」の項目）について、表の続きに詳細を記載する。

表 本事例と5つの視点の主な関係

5つの視点	本事例との関連	
	関連度合い	関連の主な内容
(1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用	■	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本地域の取組は、集落を活性化させることで担い手確保や棚田の需要増加を図り、豊かさの源泉である伝統的かつ持続可能な土地及び自然資源の利用を継承することを目的としている。</li> <li>・棚田を中心とした自然環境の調査が行われ、多様な動植物が生息・生育することが明らかにされている。</li> </ul> <p style="text-align: center;">以下に詳述</p>
(2) 自然資源の循環利用	□	(特記なし)
(3) 地域の伝統・文化の評価	□	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝統的な農山村の土地利用・景観が継承されている。</li> <li>・交流の歴史に着目したエコツーリズムが実践されている。</li> </ul> <p style="text-align: center;">以下に詳述</p>
(4) 多様な主体の参加と協働	□	<ul style="list-style-type: none"> <li>・金沢大学の里山駐村研究員制度によって郷土史家が派遣され、金蔵の特徴である独特の歴史や伝説などを研究・伝承・発信する大きな助けとなっている。</li> </ul> <p style="text-align: center;">以下に詳述</p>
(5) 地域社会・経済への貢献	□	<ul style="list-style-type: none"> <li>・棚田由来の特産品が販売されることにより地域の産業が活性化している。</li> <li>・エコツーリズムの取組により、人口160人ほどの金蔵に年間8,000人もの観光客が訪れるようになった。</li> </ul> <p style="text-align: center;">以下に詳述</p>

### (1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用

#### 【自然環境に適応した持続可能な土地利用の継承】

- ・温暖、多雨な気候である日本では、平地には広大な水田地帯が広がり、また、平坦地の少ない丘陵地や山間部にも棚田と呼ばれる傾斜地の水田が開かれ、水田耕作が営まれてきた。棚田の周囲には森林があり、これを二次林として管理することで、燃料、肥料、道具や建築物の材料等を調達していた。
- ・金蔵は水資源に恵まれなかったものの、土壌条件や寒暖差のある盆地の気候が稲作に適していた。このため、米を多産し、これを豊かさの源泉として栄えてきた。
- ・本地域の取組は、集落を活性化させることで担い手確保や棚田の需要増加を図り、豊かさの源泉である棚田を中心とした伝統的土地利用を継承することを目的としている。

#### 【生物多様性の評価と改善に向けた取組】

- ・本地域では自然環境の復元力が強く、人為的に植生遷移を止めなければ、徐々に単一の植生へと変化していってしまう。金蔵では自然資源が利用されなくなったことにより、これまで管理されていた水田や森林等が管理されなくなり、植物ほか生物多様性が減少することが危ぶまれている。

- ・地域の住民や研究者は、棚田を中心とした景観が生物にとっても大切だということを感じており、2006 2008 年度には金沢大学・里山里海自然学校により、能登半島里山里海の生物多様性調査(三井物産環境基金助成、以下「生物多様性調査」と称する)が実施され、調査地域の一つである金蔵周辺でも、植生やため池群の動物の分布状況が把握されている。
- ・生物多様性調査において、村落の中心域を占める棚田や、その周辺の管理された畦畔草地などの人為的影響の強い代償植生地に多様な植物が生育していることが明らかにされた。
- ・貴重な植物が多く見られる金蔵の植生は、金蔵村創立以来の長年にわたって自然環境に働き続けてきた人々の行為とその地域がもっている自然的営力によってつくられたものである。金蔵学校は、棚田を存続させることでこれらの生態系の保全を図っている。

### (3) 地域の伝統・文化の評価

#### 【伝統的土地利用・管理の継承】

- ・金蔵には、小規模な盆地に水田と集落があり、その周囲を二次林や人工林が取り囲むという、伝統的な農山村の土地利用・景観が継承されている。特に、棚田は金蔵の豊かさの礎となってきたものである。
- ・金蔵は山に囲まれており、水不足に悩まされることも多かったため、保生池と呼ばれるため池と、そこから分配した水をさらに承ける 11 のため池が造成され、現在まで受け継がれている。

#### 【交流の歴史に着目したエコツーリズム】

- ・金蔵は棚田における水田耕作を礎としながら、外部との交流人口を維持することで栄えてきた集落である。金蔵学校の活動も集落を存続させてきたこの仕組みに基づいており、都市域の住民を金蔵に呼び寄せ、交流人口を確保することで集落を活性化させることを目標としている。
- ・なお、古くから金蔵を支えてきた、お寺と檀家との結びつきを通じた外部の集落との交流も存続している。金蔵五ヶ寺には現在 600 ほどの檀家があり、この檀家を 12 組に分けて、月 1 回のお講の当番にしている。

### (4) 多様な主体の参加と協働

#### 【金沢大学との連携】

- ・金蔵地域では、集落全戸が協力することはもとより、学術機関等と連携した取組を行っており、特に金沢大学による里山駐村研究員制度が特徴的である。この制度により金蔵学校の取組と金沢大学の研究活動が連携し、双方の活動が活性化されている。
- ・里山駐村研究員制度とは、金沢大学が、里山保全や地域の活性化などに取り組んでいる地元の人を「里山駐村研究員」又は「里山客員研究員・客員調査員」に委嘱し、民学連携を図るものである。
- ・研究員は地域の里山活動に関する情報提供や大学への提言、研究者との意見交換など、大学と連携した活動を展開する。
- ・里山駐村研究員の活動は、地域の要望や提案を集め、大学の研究活動に活かすための「情報収集」、大学が蓄積してきた研究成果を地域に活かすための「情報発信」、里山連携を軸とした民学連携の理念や方向性について理解を深め、地域振興、里山研究の活性化を目指す「勉強会」の 3 つが軸となっている。
- ・金蔵においては、金蔵集落在住の郷土史家が駐村研究員となっており、金蔵の特徴である、独特の歴史や伝説などを研究・伝承・発信する大きな助けとなっている。

## (5) 地域社会・経済への貢献

### 【農産物のブランド化による産業活性化】

- ・ 棚田で収穫された米は、昔ながらの手法である「はざ干し」によって自然乾燥されている。昔ながらの方法である「はざ干し」は手間暇がかかるが、米粒のひび割れや過乾燥を防ぎ、食味を向上させる効果がある。
- ・ 集落の伝統的景観の主要素である棚田で収穫されたことや、伝統的手法を用いて食味を向上させたことに加え、金蔵の米は 1300～1500 年ごろの古い時代も年貢として上納されなかったため、門外不出の幻の米であったという歴史的背景があり、都市域からの来訪者にとっては付加価値のある米となっている。
- ・ 金蔵の棚田では酒米も生産しており、この酒米から造られた日本酒を「純米酒 米蔵金」として販売している。
- ・ さらに棚田で収穫されたもち米からは 16 種の切り餅、かき餅をつくり、「黄金もち」の名で売り出すなど、棚田由来の特産品の開発してきた。
- ・ これらの棚田由来の特産品を開発し、外部に発信・販売することは棚田の存続にも直結するものである。
- ・ 金蔵を象徴する存在である五ヶ寺の中の一つ、慶願寺の渡り廊下には「木の音（こえ）」という名のカフェがオープンしている。ここでは、金蔵団子、金蔵野菜入りピザ、古代米ケーキなど、カフェ風でありながら、金蔵由来の農産物を利用したメニューを提供している。金蔵の里山風景を散策した人たちが、金蔵のお寺の雰囲気を楽しむ、境内の四季折々の景色を楽しみながら、カフェらしいメニューを楽しむことができる。地場産の農産物の需要拡大にも繋がるものである。

### 【エコツーリズムによる交流の拡大】

- ・ 金蔵学校は、金蔵の集落そのものを「やすらぎの里」と称したエコミュージアムとしての整備を実施した。具体的には、歴史を知るための案内板や散策のための標柱の設置、ツツジやサクラの植栽による景観の向上等を集落内で取り組んだ。これにより、来訪者は景観や歴史を楽しみながら散策できるようになった。
- ・ また、金蔵五ヶ寺の紹介、金蔵に残る伝説、散策のモデルコース等が記された金蔵散策絵図を作成し、金蔵の集落を歴史・文化・自然・景観を楽しむことができるように工夫することで、外部からの来訪者を呼び込むことを図っている。
- ・ これまでの活動の積み重ねにより、人口 160 人ほどの金蔵に 8,000 人もの観光客が訪れるようになり、実際に交流人口が増加している。

以上

## 参考文献等

- ・ 環境省自然環境局（2009）「平成 20 年度重要里地里山選定等委託業務報告書」
- ・ NPO 法人 金蔵学校ホームページ（<http://po5.nsk.ne.jp/~gakkou/>）